

2023
12月

ゆうひろば

遊通信
第189号



パレスチナに平和を！キャンドルデモ（2023年11月3日）

特集 パレスチナ、西サハラ

まず停戦を！そして違法な占領・封鎖の終結を！	・・・ 2
イスラエルの「ガザ壊滅作戦」を許してはいけない	・・・ 4
私たちの無関心が事態の悪化を招いた	・・・ 6
パレスチナ関連年表	・・・ 7
西サハラ問題とは何か？そして日本の関わりは？	・・・ 8
難民キャンプで願う祖国の平和と自由—ファトマさん札幌講演会の報告	・・・ 10

寄稿 オリパラ住民投票活動顛末記	・・・ 12
寄稿 与那国・石垣・宮古・沖縄島をめぐる考える。	・・・ 14
リレーエッセイ 私と、さっぽろ自由学校「遊」（第8回）	・・・ 15
連載 タントアナクネピリカ（第8回）	・・・ 16
連載 フィールドワークな日々（第95回）	・・・ 17
さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ など	・・・ 18

特集 パレスチナ、西サハラ

イスラム組織「ハマス」による越境攻撃をきっかけにしたイスラエル軍によるガザ地区への報復攻撃が続いています。自国の安全保障のためには市民の巻き添えもいとわない姿勢に国際社会の批判が高まっているにもかかわらず惨劇が続く、まさに異常事態です。日本人としてどう考え、解決に向けてどう行動していくべきか。植民地主義や自決権など共通の課題を抱える「西サハラ」の独立問題も合わせ、考えます。

まず停戦を！そして違法な占領・封鎖の終結を！

北海道自治労会館で11月28日（火）に行われた、日本の軍拡をめぐる講演会の中で、パレスチナと深くかかわって来た室蘭工業大学の清末愛砂教授（憲法学）が、国際法に照らしながらガザの情勢を考える特別報告を行いました。了解を得て内容を紹介します。



ガザの現状を考える時に忘れてならないのは、ガザがこれまで16年間もイスラエルによって占領され、封鎖されており、問題の始まりはハマースがイスラエルを越境攻撃した10月7日ではない、ということです。

ガザは今も占領下にある

ガザは東エルサレム、ヨルダン川西岸とともに1967年の第3次中東戦争でイスラエルに占領されました。人口は現在約230万人。70%がイスラエル建国の過程で故郷を追いやされた難民です。イスラエルは2005年にガザから軍隊と入植者を撤退させました。これにより、あたかもガザは自らの占領下にはないかのように振る舞っています。国

際的な批判を避けるとともに、占領地に対して国際法で求められる文民の保護という責任を免れるためのイスラエルの強弁です。そもそも、イスラエルは従来から「ヨルダン川西岸地区やガザを占領していない、これらの地域は最終的帰属が決まっていない係争地である」と主張してきましたが、そのような言い訳は国際的に通用しません。

撤退の翌年、立法評議会選挙でパレスチナ人はハマースを選びました。それまでのパレスチナ解放運動の主力だったファタハに汚職の問題などがあって、そこへの批判もありました。その民意を否定したのが、民主主義を標榜して来た西欧諸国です。イスラエルと一緒にになってファタハに肩入れして武器などを供与し、ハマースとの内戦を起こさせ、翌07年からガザの封鎖が始まったのです。イスラエルが、人の動きに加え物流、水や電気、ガスなどのライフラインまでも押さえられています。人びとは極めて苦しい生活を強いられ、ガザは「天井のない監獄」と呼ばれるようになりました。

国際法上の「占領」とは、事実上、敵軍の権力の範囲内にあることであり、内部に軍隊が駐留しているかどうかは関係ありません。現に国連も「オキユパイド・テリトリーズ」と呼んでいます。厳しく封鎖されたガザの状況は、「占領下にある」と考えないと説明がつきません。そして、10月7日のハマースによる攻撃後、イスラエルが最初にやったのは完全にライフラインを止めること。空爆に加え、食料も水も手に入りにくくなる。明確な国際法違反です。



清末愛砂さん
(2023年11月28日、自治労会館)

イスラエルは今回の攻撃を自衛権の行使だと説明し、西欧諸国もそれを認めています。自衛権とは、伝統的に国と国の間に適用されて来た考え方です。2001年のアフガニスタン戦争で米国がアルカイダに対して自衛権行使を主張して以降、非国家主体に対する国家の自衛権行使を認める研究者も出てきていますが、私は認めてはいけな

いと考えています。もちろんハマースのやったことは容認できませんが、国家対非国家というのは極めて非対称な関係で、しかも占領者の力が圧倒的な被占領地で占領者の自衛権を認めてしまつたら、無茶苦茶なことになりかねない。それが今、現にガザで起きているのです。

「ストップ・ジェノサイド」の声が世界に広がっています。ジェノサイドは、国際法上、ある集団自体を破壊する意図をもって行ういくつかの行為だと定義されています。16

追放を狙った生活破壊
イスラエルはガザ北部を徹底的に破壊し、

避難の名目で南部への移動を強いています。意に反した移動はそれ自体国際法違反です。しかも、北部のジャバリヤ難民キャンプの、避難所としても使われている国連の小学校や、南部でも国連の学校を、国際法の保護対象であるにもかかわらず攻撃しています。ガザを破滅的に破壊し、パレスチナ人が暮らせないようにする、避難の名の下にガザから追放することを目指していると言わざるを得ません。なぜパレスチナ人追放を狙うのか。それは、イスラエルが70万人とも80万人とも言われるパレスチナ人を追放し難民化させて成立した国家だからです。

（文責・飯島秀明）

特集

イスラエルの「ガザ壊滅作戦」を許してはいけな

猫塚義夫

2023年10月7日、イスラム組織ハマス（イスラム抵抗運動）がガザを封鎖している分離壁やフェンスを壊してイスラエル領内に侵入し、イスラエル人1200名の殺害と200名以上の人質をとらえたことに直接的に端を発した今回のガザ軍事衝突は、すでに2ヶ月を過ぎました。

イスラエルからの軍事攻撃は、欧米5か国が主張した「自衛権」などをとくに超えた、史上最大のガザへの「ジェノサイド的」軍事攻撃となっています。（占領国家のイスラエルが「自衛権」を主張することは不当なことです）

イスラエルの被害は1400名とはいえ、パレスチナ側では12月9日時点で死者1万7400名、うち子どもが6000名を超え、実に70%以上が婦女子で占められています。また、ガザには当時、臨月を迎えている5500名を含む妊婦さん5万名がいたと言われています。

イスラエルは、ガザ北部への掃討を進めるとの理由で、住む人々に南部への「避難」を呼びかけ、集団移住を強行しています。これ自体重大な人権侵害ですが、たとえ南部に「避難」し

たとしても、そこにはイスラエル軍による陸海空からの攻撃が待っているのです。そこには、すでに190万名の人々が避難し難民キャンプや野宿を強いられているのが実態なのです。さらに11月14日には、ハマスの司令部の存在を口実に、イスラエル軍はガザ最大の病院であるシャファ病院へ軍事侵入を図りました。院内には650名の患者さんと共に2500名の医療従事者・避難民がいるのにもかかわらずの蛮行でした。ここでは、生まれてきた新生児65名中45名が死亡させられてしまいました。まさに、赤ちゃんまでもがイスラエルからの虐殺の犠牲になっているのです。

これまでガザへの軍事侵攻は、2008～09年、12年、14年、21年と繰り返され、犠牲者が2300名にのぼったこともありましたが、それでさえ受け入れがたい悲劇なのに、今回は、既に1万名を超える死者数を数える、桁違いの軍事攻撃なのです。イスラエルはガザ侵攻を「定期的な芝刈り」と言ってきました、しかし今回は芝を根っこから掘り崩すという徹底的な「ガザ壊滅作戦」といふべきものです。

10月7日のハマスによる越境攻撃は、批判さ

れるべきものですが、同時にイスラエルによる占領・封鎖下では、ハマスの行動は被抑圧側に与えられた抵抗権でもあります。それは、ファシスト政権下で活躍したレジスタンス・パルチザンと同様に正当な権利なのです。今回それを口実にしたイスラエルの軍事侵攻は、一般市民、子ども・老人・女性など弱者を無慈悲に虐殺する行為は、まさに不当な「集団懲罰」であり「集団虐殺」であります。国連からも指摘されている国際人道法違反そのものです。こうしたイスラエルの植民地支配とその上に繰り返される軍事侵攻は、今後の国際平和を創るためにも必ず克服されなければならないものです。

ヨルダン川西岸での難民キャンプで、イスラエルがパレスチナ人を「不当逮捕」するため1万名を超える兵士を進軍させ、キャンプ全体を威圧し攻撃する場面に出会ったことがあります。その時にはキャンプ内の診療所の庭に催涙弾が飛んでくることもありましたが、しかし、今回のガザでは病院そのものを攻撃しています。これまでの延長線上では図り切れない徹底した軍事作戦であり、ジェノサイド（集団虐殺）となりつつあるのです。

こうした事態は、10月7日に

偶然発生したわけではありません。2005年に始まり07年に完成したガザを取り囲む分離壁やフェンスにより、これまで16年にわたるガザの「完全封鎖」が続けられてきたのです。16、18歳以下の人々は、まさに「封鎖しか知らない子どもたち」となっています。ガザの若者たちにとって、未来への希望が見えないどころか将来の夢が全く描くことができなくなっているのです。



いつ封鎖が解除されることも知らず、ガザで生きる若者にとって未来への展望や希望が絶たれ、悲観した若者の自殺の増加も報告されています。また、燃料の枯渇は、ただちに電力不足に繋がります。1日の通電は4時間で夜は漆黒の闇の中の生活です。また、ガザ地区にあった産業の発展を阻害してきたのです。

その中でガザの実情は、筆舌にあらわすには過酷すぎるのです。経済は疲弊し失業率は平均50%、28歳以下の若者に限れば実に70%超までに至っています。多くの若者が大学で学んでも、その後研究を続けたり社会に出て働くという希望を語ることができません。

医系学生も同じで、医師・看護師の資格を取っても経済的な疲弊で彼らを雇用する病院はほとんどありません。彼らは無償で病院に勤めて、労働した「証明書」を獲得したり、自らの技術を高める努力を続けています。私たちは、ガザ地区・イスラミク大学看護学部と札幌市立大学看護学部との交換留学について準備を始める

ところでした。ガザ地区の沖には、イスラエル海軍が封鎖しており近づく銃撃されています。ガザ地区では現地の報道機関が事態を毎週報告しています。封鎖前であれば、ガザの漁業は、ガザ港からレバノンやエジプトの沖まで行って豊かな海の恵みを得ることができたのです。現在、ガザの漁村は最も貧困に喘ぐ地域となっています。路上で、子どもたちが裸足でサッカーに興じる

姿をよく見かけるのです。

現在、イスラエルの軍事侵攻はガザ南部にまで広がり、あの狭い地域に190万 명이避難を強いられています。そして、イスラエルの狙いは、当初のハマスの壊滅からパレスチナ人の「絶滅」へ。現地はまさにジェノサイド状態となっているのです。

私たちは、ガザ・パレスチナの命を救い、パレスチナの解放をめざして、以下の声明を發しました。

ハマスとイスラエルは直ちに停戦を行なうこと。

ガザ地区への人道支援活動の保障と物資の搬入を直ちに実現すること。

16年続く「ガザの封鎖」を解放し、国際法違反の入植地活動を中止すること。

日本政府はイスラエルとハマ스에非暴力で平和的解決を強く働きかけること。

こうした取り組みの中で、東京・京都・名古屋・仙台・沖縄・札幌などこれまで経験のない全国レベルの「合同行動」も始まっています。今後、北海道はもとよりパレスチナを思う全国のすべての人々と連帯して活動を進めてまいります。

猫塚義夫（ねこづかよしお）

整形外科医、パレスチナ医療奉仕団団長。車いすを海外に届ける活動をきっかけに中東の紛争地支援に携わり、これまでに14回の現地支援を重ねてきた。

特集

私たちの無関心が事態の悪化を招いた

小内ゆい

私は北海道パレスチナ医療奉仕団のメンバーの一人として、10月29日から11月4日までの7日間、ヨルダン川西岸地区や難民キャンプを中心に医療支援に入る予定でした。

北海道パレスチナ医療奉仕団の活動を知るときかけとなったのは、2018年11月に医学生向けに開催された猫塚先生による講演会でした。当時医学生だった私は、初めてパレスチナの、ガザの実情を知り、自分の日常とのあまりの違いに衝撃を受けました。その時は自分に何かができるとは思えず、これほどまでに残酷なことを人間ができるという事実を信じたくありませんでした。それでも学ぶことをやめてはいけないと思い、奉仕団主催で行われた清末愛砂先生による中東における女性の人権問題に関する講演会に参加しました。

女性の人権問題について学んでいくと、たとえ遠い国の問題であったとしても、本質的には日本におけるあらゆる人権問題と共通するのではないかと、自分も当事者の一人として考えなければならぬ、と思うようになりま

した。清末先生に「日本にいる自分に何ができますか？」という質問をした際、「医師になつたらぜひ奉仕団に入って一緒に支援に行きましょう」と言っていた言葉が忘れられず、医師として働き始めて2年目の今年8月、奉仕団に入団しました。そして同じ病院の整形外科病棟で働く看護師の武田美優さんに誘われ、10月に一緒に医療支援に入ることになりました。

奉仕団には理学療法士として働くメンバーもいるため、整形疾患を抱えるパレスチナの人びとへのリハビリテーションや、負傷した際の適切な処置の方法を分かりやすいパンフレットにするなど、自分たちにできることを考えていました。しかし、2023年10月7日、奉仕団主催の事前報告会で決意表明をしている最中、長年にわたるイスラエル軍による占領や虐殺に対抗して、ハマスによるイスラエルへの攻撃が始まり、支援は延期となりました。

このような事態になるまでパレスチナの抱える問題を放置してきた国際社会、日本、そ

して自分自身の無責任さと残酷性を思い知らされました。これまで周囲に中東情勢について話せる人はおらず、若い人に興味を持ってもらえるように分かりやすく伝える、という発想すらありませんでした。こうした自分の無責任な行動の積み重ねが、周囲の無関心を助長させていたのだと気付かされました。現地に入ることでできない自分が、いま日本でできることは、ガザやパレスチナの現状とこれまでの歴史を分かりやすい言葉で伝えていくことであり、これまで継続的に支援してきた奉仕団のメンバーの声を届ける機会を作ることだと考えています。

また、現地に入ることができるようになった時、大切な人が目の前で亡くなっていった、残されたガザの、パレスチナの人々の生活と心に寄り添うことから始めたいと考えています。医療はそうした人々の生活や精神的な基盤があって初めて成り立つものだからです。そのために今できることを積み重ねていきたいと思っています。

小内ゆい（おないゆい）

札幌市内の病院で働く初期研修医。2023年8月に北海道パレスチナ医療奉仕団に入団。軍拡NO！私たちの会・北海道や反核医師の会に所属し、活動している。

悲劇は欧州の過ちから生まれた

パレスチナ問題をめぐる動きを見ると、パレスチナでのユダヤ人国家樹立を目指すシオニズムが、欧州の反ユダヤ主義によって生み出され、帝国主義がそれを育て、ファシズムが拍車をかけるという構造が浮き彫りになる。そして、その欧州諸国の不正義の代償を今、何の責任もないパレスチナ人が払わされている。

ユダヤ人が「ローマ帝国に奪われたものを取り戻す」とパレスチナ人の土地を奪うことは正当なのか。ホロコーストの被害者だからといって、抵抗する。パレスチナ人を過剰に抑圧するナチスの再来のような振る舞いは許容できるのか。しかし現実には、戦後に発足し、人民の同権および自決の原則をうたったはずの国連も、パレスチナ人を犠牲にする対応策しか提示できなかった。

イスラエル建国から4分の3世紀。抑圧と抵抗の連鎖で相互の憎悪は年ごとに深まり、解決は困難さを増してくばかりだ。しかし、日本を含む旧帝国主義諸国の遺した負債は、パレスチナ問題に限らず、今も世界各地で紛争の火種となっており、この克服を抜きに真の平和は実現できない。まずは焦眉の急であるパレスチナ問題について、国際社会の知恵と行動が求められている。（文章、年表とも飯島秀明）

飯島秀明（い い じ ま ひであき）

元新聞記者。「遊」、平取「アイヌ遺骨」を考える会、沖縄の基地を考える会・札幌の各会員

＜パレスチナ関連年表＞

1～2世紀	ローマ帝国がユダヤ人をパレスチナから追放（離散＝ディアスポラ）
7世紀以降	アラビア半島からアラブ人が北上し、パレスチナに定住
中世	欧州キリスト教社会でユダヤ人への迫害が始まる（11世紀以降に本格化）
16世紀以降	オスマントルコ帝国がパレスチナを獲得。イスラム教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒が共存
19世紀	欧州で新たな反ユダヤ主義。ロシア・東欧などで激しいポグロム（集団虐殺）が発生
1897年	スイスで第1回シオニスト会議開催、パレスチナにユダヤ人国家の建設を目指す綱領を採択
1914年	第1次世界大戦勃発（～18年）
15年	英国がオスマン帝国支配下のアラブ人に独立を約束し反乱を促すフセイン・マクマホン書簡
16年	英仏が大戦終結後のオスマン帝国の領土分割について密約（サイクス・ピコ協定）
17年	英国がパレスチナにおけるユダヤ人の「民族的郷土」建設を支持（バルフォア宣言）
22年	パレスチナ、英国の委任統治領に
39年	第2次世界大戦開戦（～45年） ナチスドイツがユダヤ人約600万人を虐殺（ホロコースト）
47年	国連総会でパレスチナ分割決議。人口が30%程度のユダヤ人に、大半の農業適地を含む50%超を与える内容
48年	イスラエル建国、第1次中東戦争が勃発（イスラエルが周辺アラブ諸国に勝利し、パレスチナの約80%を支配）、70万～80万人と言われるパレスチナ難民が発生
56年	第2次中東戦争（スエズ戦争）
67年	第3次中東戦争 イスラエルがガザ、ヨルダン川西岸、東エルサレムを占領
73年	第4次中東戦争
93年	オスロ合意（米国の仲介でイスラエルとPLOが相互承認、一部地域でのパレスチナ人自治の開始、その他の問題は先送り）
95年	オスロ合意の当事者であるラビン・イスラエル首相をユダヤ人の合意反対派が暗殺、和平が停滞
2006年	パレスチナ立法評議会選挙で、ハマスが勝利。その後、イスラエルがガザを封鎖を強化
08年	イスラエルがガザに侵攻（その後も数次にわたり大規模攻撃）
23年10月	ハマスがイスラエルを越境攻撃、イスラエルは報復としてガザに侵攻、大量殺人と生活基盤の徹底的な破壊を開始

特集

西サハラ問題とは何か？
そして日本の関わりは？

松野明久

西サハラ問題とは？

一言でいえば、西サハラという旧スペイン植民地の独立が頓挫している、いや、頓挫させられているという問題だ。キーワードは非自治地域、非植民地化、自決権の三つだ。

非自治地域とは旧植民地を指す。国連憲章七三条に規定があり、当該住民の政治的願望が考慮され、自由な政治制度の発達が支援されなければならぬ。現在非自治地域は一七地域ある。

非植民地化は、文字通り植民地を終わらせることであり、独立、海外州、自由連合といった選択肢がある。一九六〇年の国連総会決議一五一四(XV)、通称「植民地独立付与宣言」は植民地人民への無条件の主権委譲、非植民地化の促進を求めた。

自決権はこの「宣言」に明示されており、すべての人民がもつ、自由にその地位と体制を決定する権利をいう。西サハラ人民の自決権は一九六五年の国連総会決議二二二九(XXI)で確認された。

ところが、国連決議によって認められた西サ

ハラ人民の自決権は、モロッコの軍事侵攻と占領によって

今なお行使されていない。す

でに四八年、西サハラの人びと(サハラウィ)は占領下で弾圧、暴力、差別に苦しみ、難民キャンプで祖国帰還の日を待ちつつ、厳しい暮らしに耐えている。

巨大な力に踏み潰される？

この紛争が解決されない理由は国際政治にある。そこに日本も関係する。米国、フランスがモロッコの後ろ盾となり、欧州諸国、日本などが事態を黙認している。それがモロッコを強気にさせている。

それほどモロッコは重要な国なのか。

まず、米国はジブラルタル海峡を臨むモロッコを戦略上重視する。対テロ戦争でもモロッコ王室はパートナーだ。強権的な王政はイスラーム勢力を抑えてくれる。親イスラエルでもある。フランスは仏語圏西アフリカの要としてのモロッコを重視する。仏企業の進出先、仏製品の市場でもある。フランス語を使う多数の教育機



松野さん(左)とファトマさん

関を通じ、フランスの文化的ヘゲモニーが確立している。

他の欧州諸国もこぞってモロッコにすりよる。欧州向け野菜果物を大量生産するアグリビジネス、豊かな漁場から揚がる水産物及びそこでの操業権、欧州グリーンディールに合致する風力発電など、欧州資本にとってモロッコは魅力にあふれている。

他方で、欧州諸国はモロッコを恐れている。地中海を渡る移民ルートのひとつがモロッコ経由だからだ。モロッコの胸先三寸で欧州に渡る人の流れが増減する。欧州が気に入らない態度をとれば、モロッコは管理を緩めて移民を送り込む。スペインは昨年それでパニックになった。こうした状況下、モロッコは西サハラの(独立なき)自治案を提示した。欧米主要国はその自治案になびいている。日本もだ。しかし、そんな原則を無視した妥協で本当にこの紛争は解決するのだろうか。

西サハラの苦悩

侵略時、モロッコは砂漠を逃げる難民たちを空爆した。ナパーム弾や白燐弾の使用も疑われている。モロッコ軍は殺害した人びとを大量埋葬地に埋めた。犠牲者の数はわからない。

近年サハラウィの若者たちの活動が活発化している。占領地で、難民キャンプで、欧州各地で、闘争は世代を超えて受け継がれている。

日本でのキャラバン

欧州では西サハラ連帯運動がさかんだ。政府はどこもだめだが、市民がそれを変えようとしている。日本では、西サハラ友の会がキャラバンと称して講演ツアーを行った。福岡から札幌まで全国一二ヶ所の受入れ団体を繋いで、難民キャンプ出身のファトマ・ブラーヒムさんは直接聴衆に訴えた。

「難民キャンプに生まれ育った私たちは魚が食べれない。それなのに遠く離れた日本で西サハラ産のタコが食べられている。」

サハラウィがその恩恵にあずかれない祖国の海の豊かさを占領者との取引で日本のわれわれが享受している。グローバルゼーションとは理不尽なものだ。連帯運動の目標はモロッコの西サハラ占領を終わらせること。ファトマさんが残した宿題に取り組むのはこれからだ。

松野明久(まつのあきひさ)

西サハラ友の会事務局長。一九八〇年代から東ティモール連帯運動、インドネシア民主化支援にかかわる。二〇一七年西サハラ訪問。大阪大学名誉教授。

西サハラ住民の人口は約六〇万人。その内難

民キャンプに約二〇万人が暮らす。モロッコは二七〇〇キロの「砂の壁」を建設し、そこに地雷を埋め、往來を不可能にした。資源豊かな占領地を「防衛する」ためだ。

モロッコは、モロッコ人の移住を税を優遇して奨励している。モロッコ人が経済を支配し、サハラウィは周縁化されている。警察が住民を監視し、サハラウィは疑われ、就職や進学で差別され、ひどい場合は逮捕・拷問され、投獄される。平和的な主張も許されない。

日本の関わりは？

日本はモロッコの西サハラ併合を認めていない。しかし、実際にはモロッコ寄りだ。

日本はモロッコ国営会社が西サハラで違法に採掘するリン鉱石を輸入し、西サハラの海でと



特集

難民キャンプで願う祖国の平和と自由 —ファトマさん札幌講演会の報告

笹岡正俊

私たちにとってなじみのない西サハラ。この秋、ここ札幌でも、西サハラ問題の理解を深めるため、「西サハラ全国スピーキングツアー2023」の講演会を、複数の市民組織や個人有志の協力のもとで開催しました。講演会でお話いただいたのは、アルジェリアにあるサハラ・ウィの難民キャンプに生まれ育ったファトマ・ブラヒムさん。現在は、開発NGOに勤めながら、モロッコの支配に対する非暴力抵抗運動を続けている女性です。

11月9日（木）昼、ファトマさんと松野明久さん（西サハラ友の会事務局長）が新千歳空港に到着。その足でウポポイへ行き、博物館を見学。翌10日午後は、アイヌ民族の女性としてマイノリティ女性への差別の問題に取り組んでこられた多原良子さんと面談。「複合差別」の概念—例えばマイノリティの中の女性がさらに差別を受けるといった具合にいくつかの差別が絡み合うことで被害が増幅されるという考え方—を知り、それこそまさに自分が苦しんできたものだという気づきを

得て、アイヌ女性への差別をなくす運動を頑張っていることと聞いた、という多原さんの話にファトマさんは強く感銘を受けている様子でした。

その日の夕方に講演会を開催しました。まず松野さんによる西サハラ問題の概要説明の後、ファトマさんにお話をしていただきました（通訳は室蘭工業大学教授・清末愛砂さん）。以下はその抜粋です。

難民キャンプとはどのような場所か

1999年に難民キャンプで生まれました。小さい頃はインターネットもテレビもなく、私が知っている世界は砂漠の中にある難民キャンプだけでした。小さなころから「ここは難民キャンプであり、西サハラが自分たちの故郷だ」ということを親から教わってきたけれど、小さかったのがどういいうことかわかりませんでした。7歳の時、スペインの市民団体と難民キャンプが連携して

実施する二カ月間のホームステイプログラムに参加するためスペインを訪問しました。そのときに初めて樹木を見ました。見るものすべてが驚きの連続でした。7日間はまったく言葉が話せなかったほどでした。

スペインから戻って「なぜ自分たちはこのようなところに暮らしているのか」と両親に尋ねました。7歳の子供にわかる言葉でいろいろと答えてくれたけれど、疑問は解消されませんでした。

10歳で小学校を卒業しました。その後は遠く離れた町に親元を離れて移り住み、中学校に通いました（キャンプには中学校がないため）。最初はアルジェリア語がわからず、とても苦労しました。4年間の在学中（中学は4年制）、親元に戻れたのは入学2年後の夏休みだけです。手紙しか通信手段がなく、キャンプにはポストが無いので、手紙がきちんと届いたかどうか分かりません。家族が無事に暮らしているのかどうか確認できなかったのが一番辛かったです。

難民キャンプの生活は、世界食糧計画など国際機関からの食糧支援によって成り立っています。支援されるのは、コメ、砂糖、小麦といった基本的なもので限られています。現在、世界中で難民が増え続けているなかで

ナーの支援能力にも限りがあるため、すべての難民キャンプに十分な支援物資が提供できなくなっています。難民キャンプには、いくつかの診療所がありますが、そこにある医療器具は基本的なもので限られているため若くして亡くなる人も少なくありません。

難民キャンプでの活動

学生時代、当初は医者を目指していましたが「西サハラ問題やサハラ・ウィの存在について報じるジャーナリストは多くない」と



ファトマさん札幌講演会（2023年11月10日、札幌エルプラザ）

考え、学部でメディアコミュニケーションを、大学院でオーデオビジュアルについて学びました。大学在学中、UESARIO（西サハラ学生連合）—自決権を勝ち取るための活動を行うサハラ・ウィの青年組織—に加わりました。そこでは、夏休みにキャンプに戻って、人びとをエンパワーメントするための活動を行ってきました。現在は、文化継承に関する取り組みも行っています。また、2020年に停戦合意が破棄される前までは、「壁に向かって叫ぶ」運動も行っていました。これは西サハラの土地を東西に二分する「砂の壁」の付近に行き、この壁が恥ずべき存在であり、基本的人権に対する犯罪であることを叫ぶ非暴力平和運動です（その模様はドキュメンタリー「Life is Waiting」<https://www.youtube.com/watch?v=9QzRzm4uFXU>で観ることができます）。

独立と自決権への願い

私たち（の祖先）はもともと難民キャンプより良い、美しく豊かな資源のある場所に暮らしていました。しかし、キャンプの子供たちは魚や樹木などに接することができません。それを見るのはただアニメのなかだけで

す。キャンプで生まれ、死ぬというのは大変つらいことです。私たちは住民投票の約束の実現と、そのための市民社会や国の支援を待ち続けてきました。私たちがもめているのはとてもシンプルで基本的な権利です。住民投票、一人一票、そしていかなる条件も付帯されない自決権です。そのことを日本の方々に知っていただきたいと思っています。

会場には約40人が詰めかけ、熱心にファトマさんの話に耳を傾けました。参加者の方々に記入をお願いしたコメントシートには、「世界の良心を信じ、沈黙せず、連帯していききたい」「今日聞いたことは周りの人に伝えていきたい」といった応援の声が多く寄せられました。

ファトマさんの自らの経験に根差した平易な語り、多くの学びをもたらしてくれました。西サハラと日本の心理的距離がぐっと近くなった、とても意義深い会でした。

笹岡正俊（ささおか まさとし）

北海道大学教員。専門は環境社会学。日本平和学会北海道・東北地区研究会代表。

稿 寄

オリパラ住民投票活動顛末記

高橋大輔

活動の経緯

2023年7月9日、ジャーナリストの今井一氏が札幌で開催したセミナーに参加した時のこと。その1年以上前から私は札幌冬季オリンピック・パラリンピック（札幌オリパラ）招致反対運動に関わっており、「オリパラのような多額の資金を要し、市の将来の街づくりに大きな影響を及ぼす重大な問題は住民投票で決めるべきである」というのは当初からの持論でした。ただ、議員提案が否決され、請願・陳情がことごとく不採択・廃案となるのを見守るばかりで、自分で住民投票を求める運動を立ち上げるという「踏ん切り」がなかなかつかずにいたのです。この間、「何か行動しなければ」という思いが蓄積されていたところに、セミナーで各地の住民投票の事例を語る今井氏の情熱が伝わり、自分の内部でスイッチが入ったように感じました。

今回の運動は地方自治法第74条に定められた条例制定直接請求制度を利用するものでした。署名集めには期限があること、I O C

が2030年の開催地内定を出すのが早くて年内という情報があったので、時間の余裕はありません。早速取り組んだのが仲間集めと情報収集です。7年前から一緒に活動している「さつぽろ勝手連」のO氏とS氏は二つ返事で了承。市民の風・北海道のMLで参加を募ったところ、J氏ほか数名が真っ先に手を挙げてくれました。また、大阪IRの住民投票運動に参加した方から、当時の署名簿・チラシ類を送っていただきました。

そして7月16日に第1回ミーティングが行われたのですが、この時点では全員が何もかも初めてで分からないことだらけ。例えば署名期間は政令都市は2ヶ月なのに、1ヶ月と勘違いするなど、お世辞にも順風とはいえない不安だらけの船出だったのです。7月22日の第2回ミーティングでは政党関係者の他、「札幌市自治基本条例」の生みの親である神原勝先生も出席され、活発な議論が交わされるとともに、直接請求に向けて以下のような方針・意義が確認されました。

① 市民自治の重要性と制度不備を一般社会に向かつてアピールし、招致推進活動を再開した市と議会に疑問を投げかけ世論喚起する。

② 意向調査が秋に行われる可能性があり、その動きに合わせて署名活動をするので、市と議会を牽制する。

そして、秋元市長に対し、住民投票を実施する気があるのかどうかを公開質問状で問うことが決定されました。

8月2日、スポーツ局招致推進部で公開質問状を手渡しし、その後初めての記者会見を開きました。この時以来、私たちの運動は多くのメディアの注目を引くことになりました。8月8日に市長からの回答が届けられました。が、中身は予想通りそれまでの答弁を繰り返すだけの誠意のないものでした。お盆休みを挟んで、直接請求の活動を開始する旨の声明を出したのは8月16日でした。

この間、運動に対する否定的な意見や慎重論も周囲から聞かれました。「2030年も2034年も札幌は本命から外れているという情報もあるのに意味ないのでは?」「I O Cからの内定が出てからでも遅くないのでは?」「あまりに拙速で組織も脆弱」…等々。しかしながら、オリパラのような重要な事項

が一度も市民の声を直接聞くことなく決められていく過程を黙って見過ごすことが私にはどうしてもできませんでした。賛成でも反対でもいいから、自治基本条例に明記されている住民投票で決着をつけるべきであり、そのことの重要性を世論に訴えたい、という思いが勝りました。そして、その考えに賛同してくださる多くの方に支えられ、運動は進んでいきました。

8月末から市内各区で説明会を行い、請求代表者は最終的に130名に達しました。

9月27日に請求代表者証明書が交付され、いよいよ署名活動開始。期間は9月28日から2ヶ月間。当面必要な署名簿はかでの27の作業室で数日前から印刷し、手作業で丁合。9月29日には請求代表者・受任者の手元に署名簿を届けることができました。

9月30日には初めての街頭署名活動を大通3丁目の路上で行いました。この時、威力を発揮したのは青とオレンジ2種類ののぼり旗です。これを交互に30本立てた光景はなかなか壮観で、注目を浴びました。以降、各区で街頭署名や戸別訪問のスケジュールを立てて実行するという活動に入ります。

活動がようやく軌道に乗り始めた10月5日、「札幌五輪2030年招致断念」との

ショックな報道が流れました。早速緊急ミーティングを行い、活動を継続すべきかどうか夜遅くまで侃々諤々の議論を行いました。結論は「2034年の可能性がある以上、活動は継続すべき」というものでした。

そして10月15日にはI O Cにより「2030年と2034年の2大会同時内定」との方針が示され、「札幌は2034年も絶望的」との報道が流れました。私たちが提出した条例案は「2030年・2034年」が住民投票の対象となっており、いずれも絶望となると条例制定請求の根拠を失うことになります。10月29日の全体会議で活動終了の議決がなされました。

こうして、私たちの署名活動は心ならずも約1ヶ月で終了してしまったのですが、この活動によって得られた成果と課題について最後に触れておきます。

成果

- ① 市民自治の重要性を世論に訴え、メディアにも好意的に取り上げられるなど一定程度受け入れられた
- ② 市長・市議会の市民不在の姿勢に対しNOを突き付けた

課題

- ① 実質3ヶ月という短期決戦だったため、組織作り・賛同団体の拡大・資金調達に苦労した
- ② デジタルデバインド・情報伝達の難しさを実感した
- ③ 政党との距離感が難しかった
- ④ 組織に属さない市民への浸透が不十分だった

おわりに

活動に参加してくださったすべての方に深く感謝申し上げます。

私が目指したことは、自治基本条例に書かれた市民自治の理念を絵に描いた餅ではなく実質的なものにする事です。目標は遥か彼方ですが、今後も市政の動きに注目し、時期を見て再び行動を起こす所存です。

高橋大輔（たかはしだいすけ）

札幌オリパラ招致の是非は市民が決める・住民投票を求める会事務局長。1960年生まれ、東京都出身。2022年11月までKDDI株式会社勤務。消費生活アドバイザー。

稿 寄

与那国・石垣・宮古・沖縄島をめぐる考える。

とうなち隆子

沖縄は18歳まで生活をした地で、自分の思考原点になっている。

私にとって沖縄へ帰ることは、沖縄のにおい、失いそうになる沖縄の五感を取り戻すことであり、自分を見つめ直すことでもある。

今回、琉球弧に自衛隊基地がつくられ、遠くに住んでいる私には見えてこない自衛隊基地の状況を知りたいと思い、初めて沖縄関連のツアー「与那国・石垣・宮古（以下3島）自衛隊南西・沖縄シフトの現実と平和への道筋」に参加した。

出発前、地元琉球新報の記者による事前学習、3島ではそれぞれの土地で生活、平和活動をされているガイドの説明、交流会の企画は個人旅では得られない、見えない貴重な内容であった。参加者それぞれの立ち位置で視点も異なるだろうが、私は沖縄人視点で報告をさせて頂きたい。私自身は、沖縄地元紙に触れ、友人からの情報で台湾有事に備えた軍備拡張が進んでいることへの危機感はある程度知っていると自負していた。しかし、それは傍観者で無責任な傲慢な知識であったことを認めてこの旅を振り返っている。

3島の自衛隊新基地・拡張は、沖縄島の米軍基地と同じ構造で、辺野古新基地の現状、浦添軍港への移転計画と切り離して考える事はできない。

私たちの目に触れない形で少しずつ、侵食していくアメーバのように、気が付いたときは自衛隊基地に反撃能力ミサイル、弾薬庫の整備が進む、住民には後戻りできない既成事実が作られていく。住民の生活、公道に戦車、迷彩服の自衛隊が平然と入ってくる。基地ゲート前で銃を持った自衛官の警備、貴重な自然を破壊、基地が造られる住民無視はまさに沖縄島で起きている国家権力の横暴の構造と重なる。飴と鞭で県民を懐柔、分断させる手段で容認へもっていく、その後、約束は反故にされていく。多くの日本人はそれを選んだ住民、「あなた」の責任だという。そうだろうか？

琉球弧に軍事要塞化を強引に進めているのは「私」だろうか。

考えたとき、私は1956年琉球列島米国民政府発行、ジョージ・H・カー著「琉球の歴史」序文を思い出す。

「研究の結果、中略、日本にとって琉球は単に

軍事的な前線基地として、中略、植民地としてのみ、重要性があった。日本の政府はあらゆる方法をもって琉球を利用するが、琉球の人々のために犠牲を払うことを好まない」

まさに今の状況は1879年から続く植民地の現状。それを支えているのが「日本国籍のあなた」と考えるのは、1%の私のひがみですか？

とうなち隆子

沖縄の基地を考える会・札幌。1950年沖縄浦添村生まれ、1969年4月沖縄人本土留学。



陸上自衛隊宮古島駐屯地を見るツアー参加者 2023年11月19日

リレーエッセイ

私と、

さつぽろ自由学校「遊」

第8回

かくはな かずえ
角花 一枝

「遊」の講座で私が継続して関わっているのが「読書室よりみちまわりみち」です。

それぞれが読書する場合、選ぶ本のジャンルが決まりがちです。「読書室」では、紹介する本のジャンルを決めています。自分が選ぶそうにない本、あるいは自分の興味があるジャンルでも知らなかった本、なども紹介されるので、紹介内容を聞いていただけ、心に残したい言葉があったり、知らない世界を覗いてみたりできおもしろく、ちよつぷり知識が広まったりもしました。

貸してくださった本が思った以上におもしろく、同じ作家の本をさらに読んでみるなど、自分ひとりで読んでいたのではできない広がりもありました。

また、紹介する内容から話題がいろいろな面へ広がって、気さくな雰囲気の中でそれぞれの方々の体験や考えなどを聞けることも楽しさのひとつです。

「遊」の講座の魅力は、「語学」「暮らしや環境」「社会・人権」「文化・芸術」等々、幅



広い分野にわたっていることです。その時々タイムリーな話題の講座があるのもいいなと思います。

講師の方々の知識や体験が豊富なことも魅力です。

「再生可能エネルギー」の初めの講座では、単発で参加しただけで、それまで知らなかった「超・低周波音」の問題や、住民間や市政と住民の問題など、体験者の具体的な声を聞くことができ、「環境問題」についてこれまでとは違う視点からも見る事ができるようになりました。

音楽・美術の講座では、知識は勿論のこと、

時代ごとの様々な音楽を聴いたりいろいろな作品の映像を見たりすることができ楽しかったです。

AR・VRの講座では、現在やこれからのインターネット事情について学んだり、実際にGoogleをして遠隔地や仮想世界の中に自分を置く体験をしたりとワクワクする時間も多かったです。

その他の講座でも、たくさん学びがありました。参加者の中には、その講座内容について広い知識を持った方々もいらして、その方々のお話を聞けたのも良かったです。

私にとって「遊」は、「知識や見方を広める場」であり、「本や人との出会いの場」です。

オーガニック・自然食品専門店

らる畑

おべんとうとおそうざい

らるごはん

札幌市中央区大通西23丁目

Tel 614-2406 Fax 614-3836

http://rarubatake.com

10時～19時(日～17時・祝～18時)



原田 公久枝

第8回

前号に書いた六花亭でのコンサート後の私のスケジュールが、10月は9日は宮の沢の友人のnincup（ニンチュブ）のコンサートを見に行き、12日は遊でのノンノさん詩の講座を見に行き、15日は近美でのシーちゃんこと宇梶静江の講演を聞きに。21日は友人の環ちゃんの舞台の受付他お手伝い。22日は、アメリカに帰ってしまうマイケルをウポポイに案内して、24日は北海道博物館でアイヌの歌の勉強会。25日Fアップル、31日北大での丹菊先生のアイヌの歌、踊りに関する授業。

11月は、4日、ウポポイにウタリが集合しているから会いに行つて、7日がジロタ先生と東大の先生による講演を聞きに。7日8日は二十四軒での友達の早坂賀道・ユカ力の展示会を見に。11日は旭川からの友人と呑んで、16日17日は阿寒でのパフォーマーの為のワー

クシヨップ講師タカシャインこと宇梶剛士&橋ゆかりちゃん。19日20日は山形のキリスト教系の高校でアイヌに関する授業でお話してきて、21日はジョン・レノン追悼コンサートで世界で初めてアイヌ語でイマジンを歌うこととの道新の取材、22日Fアップル、23日映画「カムイのうた」舞台あいさつ付き上映会、25日モユクサップポロでのアイヌの展示の中でのトンコリワークシヨップを見に行つてから、円山に白老のアイヌの展示を見に行つて、夜は容子ちゃんとお子たちと晩ごはんを食べて、モユクの上のAOAOでサカナやクラゲやペンギンを見てテンション上がった、30日新さつぽろのBiviを見て、夜はゆうごりんこと小野有五とタック・ハーシーさんとジョン・レノン追悼コンサートの打合せ。

12月は1日がチカホ北三条広場での『二風谷イタとアットウシ伝統的工芸品認定十周年記念』の展示に二風谷のウタリが来るので会いに行つて、2日はアイヌ語弁論大会「イタカンロー」を見に、かである。打ち上げでウタリで呑んで、5日は容子ちゃんのバースデイライブnincup・in・LOGを見に行き、6日はコンカリーニヨでの演劇「オトン死ス！」を見て（主宰のなやーんが友人なので）、8日はジョン・レノン追悼コンサート、

9日はジョン追悼の時にしか集まらない木の芽の三人でランチしながら、昨日のコンサートのニュースをスマホで見て、11日は大通り高校での授業でのお話を2コマこなして↑今がこまで。

この後、15日は東京アイヌ交流センターでお話しますが、タカシャインが聞きに来るといふ。20日は札幌大学で授業二コマお話し、21日はプロボというライブハウスで「OK&村本大輔ツーマンライブ」の受付。27日は今年最後のFMアップルに「ウポポイにー〇〇回行った」カムイ小川神威も一緒に出演で今年が終わる。

来年1月23日は九州大学に授業しに行くし、2月6日は栗山中学校で授業。6月15、16日は文化人類学会in北大で北大に残るアイヌ文化のガイドをやることまで決定しています。

ともかく忙しい日々を過ごしていますが楽しいヨ☆

原田公久枝（はらだきくえ）

札幌在住。18才年上の旦那有り。子どもなし。集金と配達のパートをしながら、アイヌの活動（歌・踊り・講演・執筆・お笑い等）をしている56歳になりました。

ているということがわかる。

おもしろいのは、今回見て回った庭に、たいてい、観賞用の草木と同時に、食用の栽培植物が植えられていることだった。観賞用の草木と栽培植物が同じ庭の中にとくに境なく植えられている、全体として庭を形作っている。デエとよばれる葉野菜、それにトマトやナスなども、違和感なく庭の観葉植物的に植えられている。

中尾佐助は、オーストロネシアの花文化の特徴として、他の二地域と違って、王宮から広まったものでなく、人びとの庭から広まった、と言っている。というのも、そこで植えられる草木は、観賞用であると同時に、食用だったり、薬用だったり、という多目的なものが多いのだ。

今回聞いた中でいちばん印象的だったのは、庭によく植えられているコリウスが、家から遠くにある焼畑にも植えられているということだ。コリウスは、シソ科の植物だが、とくに食べるものではない。なぜ畑に植えるのか。村人は「畑を美しくするため。それにほのかな匂いもよいから」と言つ。畑を美しくする、その思想やよし。

宮内泰介（みやうちたいすけ）

1961年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで環境、生活の調査中。

第九回 ソロモン諸島の庭の花

前回に引き続き、八月に訪れたソロモン諸島の話。

十五年ぶりのソロモン諸島訪問では、友人たちと旧交を温めると同時に、花の調査というのをやってみた。

花の文化は世界中にあり、相互に影響しあっている。

ソロモン諸島の人びとも、自分の家の周りに花を植えて美観を整えている。とはいえ、私自身、三十年前からソロモン諸島に通っていて、植えられている花に関心をもったのは最近のことだ。

今回、同行した金城達也君が同じく花に関心を持っていたので、一緒に調査を試みることにした。村の何軒かの家で、家の周りに植えられている植物を一つ一つ確認した。動画で撮影しながら、村人たちに花の名前などを確認しながら、見て回り、それをあとから平面図に落としてみる、という作業だった。

それまで何となく認識していたのは、クロトンくらいだったが、それ以外にもなるほどこんな草木を植えてい



るのか、という発見が多かった。どの家もたいてい、クロトンに加え、コリウス、センネンボク（コルデイレネ）の三つ（いずれも現在日本でも観葉植物として売られている）を中心にしながら、さまざまな草木が植えられている。この三つは、花よりもむしろ葉っぱを楽しむ観葉植物だが、それらの回りにハイビスカスやさまざまな種類のランが植えられていて、全体として庭の美観を形成している。

民族生物学者の中尾佐助は、世界の花文化の歴史的な中心は地中海地域と中国の二つだとした上で、それとは独立したもうひとつの中心にオーストロネシア（東南アジア・オセアニア）があるとした。そのオーストロネシア花文化の中心的な種として、クロトン、コリウス、センネンボクを挙げている（中尾「オーストロネシアの花弁文化史」）。まさにソロモン諸島もその中にいることがわかる。ソロモン諸島に人類がやって来たのが数千年前。そのときに花も一緒に持ってきたのか、あるいはあとから移入されたのか、よくわからないが、ともかく、ソロモン諸島は東南アジアとも通じる花文化を持っている、それを今日も維持・発展させて

「分からない事をわかってほしかった」とは、講座「琉球・沖縄の植民地化」の二回目「ウチナーで日本語で話していることは当たり前？」の冒頭で講師・知念ウシさんが言われたこと。それは、初回に上映された一七世紀・琉球の女性歌人を主人公にした「白屋チル」物語（一九六三年・金城哲夫監督）を観ての「言葉の意味が分からなかった」という率直な感想に対する言葉だ。

これを聞いていて、越田清和さんが編んだ「アイヌモシリと平和」の越田さんによる「まえがき」にある「何の疑いもなく自分の住む土地を「北海道」とよんできた自分、それを『アイヌモシリ』と呼ぶことは「アイヌ語にふれ・アイヌ民族とこの島の歴史を考える」ことになるを思い出し、そして今更ながら「北海道」で何の疑いもなく「日本語」で暮らしていることに気付く（越田さん、亡くなって十年だ）。

知念さんは、日本同化政策・皇民化政策を「北海道（アイヌモシリ）には日本人を送り込む。琉球では琉球人を日本人に作り変える」と言い、そして今、「マヨネーズ状の海底だろうと杭を打ち込むことは結構」「獲りすぎた鮭を保護します。誰であれ獲る権利などはありません」と「脱植民地化」には程遠い。

そして地球儀だったら、日本列島を眺めてからヒョイと東に回すと、ウクライナ・中東・アフリカが一気に目に入る。そこは「脱」どころか圧倒的な暴力そのものによる「植民地化」の真っ最中。今進んでいるのは「植民地化」が始まった五百年前、司祭ラス・カサスが報告した状況と同じではないか。違うのは、カサスの書簡が届くまでに要しただろう時間を僕は殆どゼロにして（様々なヴァイアスがかかっているにしろ）見聞きしているという事。

人が、そして言葉が入り混じり、ゴチャゴチャと暮らすことを力づくで阻むのは……。…で、年を越えます。（黒田秀之）

編集便り



会場&オンライン併用講座（2024年1～3月開講分）

（会場記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて）

中国語で読み解く東アジア 一連鎖視点を以て ★講師 朴仁哲

② 1/9（火）18:45～

カール・マルクス著『資本論』を読む ★チューター 宮田和保

③ 1/10（水）18:45～ ④ 2/7（水）18:45～ ⑤ 3/6（水）18:45～

マイナンバー制度をを考える

④ 1/11（木）18:45～ マイナンバーカードをめぐる問題 ★齋藤耕

⑤ 2/8（木）18:45～ マイナンバー制度についての私たちの疑問 ★雨宮恭子&横田恒一

言葉から考える琉球・沖縄の植民地化

③ 1/12（金）18:45～ 同化教育から見える人類館問題 ★金城馨

④ 2/9（金）18:45～ 無意識の植民地主義1 ★野村浩也

⑤ 3/15（金）18:45～ 無意識の植民地主義2 ★野村浩也

LGBT 理解増進法が成立した今、知りたいこと

④ 1/12（金）18:45～ 差別と人権の主戦場—アメリカから知る LGBTQ+ 問題の「今」 ★北丸雄二

⑤ 2/16（金）18:45～ LGBTQ+ への連帯と支援—共に生きる社会をめざして ★三浦直登

先住民族の森川海に関する権利 3 一川とサケとアイヌ民族

④ 1/15（月）18:45～ ダム、河川改修による河川環境の変化 ★稗田一俊

⑤ 2/19（月）18:45～ 藻別川流域における開発の歴史とアイヌの権利 ★平田剛士&小泉雅弘

⑥ 3/18（月）18:45～ 沙流川流域におけるアイヌの自然利用とダム開発の影響 ★貝澤美和子&貝澤耕一

半導体産業戦略の是非を問う ★講師 藤原寿和

① 1/16（火）18:45～ 地政学からみた半導体産業

② 2/20（火）18:45～ 環境・資源問題からみた半導体産業

③ 3/19（火）18:45～ ハイテク災害問題からみた半導体産業

20世紀を切り開いたアイヌ列伝 part4

④ 1/17（水）18:45～ 福祉活動から民族活動へ 野村義一 ★竹内渉

⑤ 2/14（水）18:45～ 「列伝」全20回を復習したい！ ★長岡伸一

⑥ 3/13（水）18:45～ 父・萱野茂 ★萱野志朗

このままでいいの？ 再生可能エネルギーの進め方 part13

④ 1/18（木）18:45～ 海を破壊する深海採掘 ★田中滋

⑤ 2/15（木）18:45～ 問題だらけの輸入木質バイオマス発電 ★飯沼佐代子

⑥ 3/21（木）18:45～ ネイチャーポジティブ達成を阻害する再生可能エネルギー導入 ★若松伸彦

人と動物との共存・共生をめざして part3

④ 1/23（火）18:45～ 医薬品開発と動物実験 ★海野隆

⑤ 2/27（火）18:45～ 工業型畜産と食料自給率—乳牛のアニマルウェルフェアを考える ★岡井健

⑥ 3/26（火）18:45～ 「老牛ホーム」を創る取り組み ★朝倉真輝子

安保3文書を読み解く ★講師 北村公一

③ 1/24（水）18:45～ 憲法と日本の安全保障の歴史的推移と問題点

④ 2/28（水）18:45～ 23年防衛白書にみる安全保障の扱い方と問題点

⑤ 3/27（水）18:45～ 核抑止論に対する批判的安全保障論について

出版文化の可能性 —北海道から全国に向けて発信しよう part2

④ 1/26（金）18:45～ 出版の可能性を拓く最新技術 ★竹島正紀

⑤ 3/22（金）18:45～ 道内出版の今とこれから ★本講座のPart1とPart2の講師ら

日本の植民地主義を考える —共につなぐ未来のために part2

④ 2/5（月）18:45～ 朝鮮戦争 ★金敬默

⑤ 3/4（月）18:45～ 民族学級にかようこと、言葉と歴史を学ぶことの意味 ★チョキムほか

越境する人と文化を通して読み解く東アジア VI ★講師 朴仁哲

③ 2/13（火）18:45～ 韓国全羅北道を事例として

さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ



オンライン開催講座（2024年1～3月開講分）

講座のお申込は、

<https://ssl.form-mailer.jp/fms/9fff511f795829>

より申込フォームにご記入のうえ、送信ください。



ベーシックインカムを再考する —生活保障と脱成長との関係から

④ 2/2（金）19:00～ ベーシックインカムの導入と生活保障と労働問題 ★山中鹿次ぐ

⑤ 3/1（金）19:00～ コミュニズムのコモンズとしてのベーシックインカム ★樋口浩義

なぜイギリス・EUで学ぶのか —1年以上滞在してみえてきたことは？

④ 2/3（土）19:00～ 日本の気候変動対策が遅れていると同僚に言われて悔しい ★杉岡李乃

⑤ 3/2（土）19:00～ イギリスで日本の食文化を広めるために日々奮闘しています ★常井美幸

Let's Talk! 世界と出会う英語 ★アンドレス・パトリシアン

毎月第二・第四月曜 19:00～

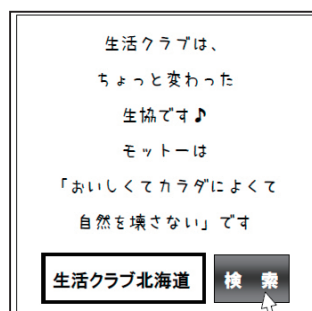
タシハンボン / もういちど ハングル ★コ・ソングョン

毎月第二・第四木曜 19:00～

VR アートの大きな可能性

3/8（金）18:45～ ★VRアートを楽しむ会

*当企画のお申込はこちらから↓





さっぽろ自由学校「遊」からのお知らせ

会場開催講座（2024年1～3月開講分）

（会場記載のないものは愛生館ビル5F 501会議室にて）



ワークショップで共に学ぶー世界と「北海道」の開発・多様性・未来

於：愛生館サロン（愛生館ビル6F 南側奥）

④ 1/13（土）14:00～ シコツの500年 ★渡邊圭、八木亜紀子

⑤ 2/10（土）14:00～ わたし・たちにとっての「豊かな社会」とは？ ★川合蘭、八木亜紀子

老いと向き合う part10

④ 1/5（金）14:00～ 交流会

⑤ 2/2（金）14:00～ 介護保険制度の改悪を読み解く ★巻渕悠

⑥ 3/1（金）14:00～ 地域とつながるーコミュニティ・カフェ「ふうしゃ」の見学 ★大西由記子
* 13:50「ふうしゃ」集合（西区西野南21丁目2-15 第一ワコービル1階）

「遊」版うたごえ喫茶 2023 於：愛生館サロン（愛生館ビル6F 南側奥）

④ 1/19（金）14:00～ ⑤ 2/16（金）14:00～ ⑥ 3/15（金）14:00～

読書室 よりみちまわりみち

④ 1/20（土）14:00～ ⑤ 2/17（土）14:00～ ⑥ 3/16（土）14:00～

アイヌアートデザイン教室 ★講師 貝澤珠美

毎月第二・第四水曜 13:00～

会費、ご寄付をくださった方々 （敬称略、順不同）

期間：2023年10月27日～12月22日

*印の方は、新規の方です。

■正会員会費を受領しました

林炳澤、出口真也、大野かほり、小町谷健彦*、
小玉悦子*、松田浩樹*、本庄十喜（以上、23年度分）、竹内渉（24年度分）

■準会員会費を受領しました

平野昌幸*、安味伸一*、久野真理子*

■寄付

◎一般寄付 小町谷健彦、前田多嘉子、千田素子、
伊藤裕子、糟谷奈保子、匿名1名

◎ひと基金 伊藤郷子

★ありがとうございました★

自然食ホロ



札幌市東区中沼西
5条2丁目3-16
TEL: 887-6224

いつも喜んで、
感謝して。

<http://horo.sunnyday.jp/>

いつだって No Nuke !



北海道のエネルギーの未来を考える
10,000人の会

憲法を私たちの生活に！ 厚別9条の会

会員は厚別を中心に、沖縄
のアメリカ兵まで約100名

共同代表 渡辺 信一

TEL.090-6218-8284 FAX.011-897-8390
E-mail: mbwatanabe@yahoo.co.jp

Simple Life, High Thinking

小4から高3まで



スコーレ ユウ

〒007-0866 札幌市東区伏古6条4丁目4-21
TEL. 785-0228

ゆうひろば

発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目 愛生館ビル5F 501

・郵便振替口座： 02780-5-47036（名義：自由学校「遊」）

・TEL:011-252-6752

・FAX:011-252-6751

・syu@sapporoyu.org

・https://sapporoyu.org



web サイト



F B ページ